

インドで生まれ、アジアに広まった仏教

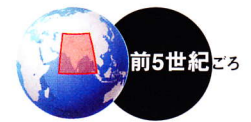
この世の苦から逃れる方法を実践的に説いた世界宗教

「もろもろの現象はすべて滅び行くものだ。怠ることなく精進せよ」そう言い遺し、沙羅双樹の下で涅槃へといたったガウタマ・シッダールタは、仏陀（悟りを得た者）とよばれて仏教の祖となった。

前5世紀ごろ、シャカ族の王子として生まれた仏陀は、この世の苦から解脱するために29歳で出家し、35歳で悟りを開き、80歳で生涯を終えるまでガンジス川中流域を説法して歩いた。入滅後もその教えは弟子たちに口伝され、のちに阿含経（初期経典）にまとめられた。

前3世紀、インド初の統一王朝マウリヤ朝の第3代アショーカ王に保護された仏教はインド各地で栄えた。仏陀の入滅後、肥大化した教団は保守派の上座部と進歩派の大衆部に分裂、さらにいくつかの部派へと分かれた（部派仏教）。このうち上座部仏教はセイロン島を経由して、ビルマやタイなどへ伝わった。

マウリヤ朝の崩壊後、1世紀のクシャナ朝の時代に、大乗仏教が生まれた。大乗仏教は、仏教学者ナーガールジュナ（竜樹）によって体系化され、チベットや中央アジアを経由して中国や日本などへ伝わったが、結局インドでは仏教はヒンドゥー教に吸収され、定着しなかった。



前5世紀ごろ

アジアへ広まった個々の修行を重視する上座部仏教と、民衆の救済を求める大乗仏教は、発祥地インドでは定着しなかった。

仏教の誕生とインド王朝

前5世紀ごろ 仏教の誕生

諸国をめぐった仏陀のもとに弟子たちが集まり、サンガというゆるやかな教団をつくった。

前317ごろ～前180年ごろ マウリヤ朝

マウリヤ朝はインドを初めて統一した王朝。第3代アショーカ王は自ら仏教に帰依（きえ）し、その教えを政治理念とした。



部派仏教

教団がいくつかの部派に分かれる。

上座部仏教

修行者は自身の救済を求め、ひたすら自己の修行に精進した。「小乗仏教」とよばれることもあるが、これは大乗側からの蔑称。

1～3世紀 クシャナ朝

西北インドから中央アジアを支配したイラン系民族の王朝。ガンダーラ美術を生み、仏教を中国へ伝えた。

大乗仏教

出家した修行者だけでなく、一般民衆の救済と成仏を説いた。「大乗」とは大きな乗り物の意味。



インドではヒンドゥー教に吸収

仏教伝播のルート

- 現在の主な宗教分布
- 上座部仏教の伝播
- 大乗仏教の伝播
- 仏教伝播における主な拠点・都市
- 上座部仏教
- 大乗仏教
- チベット仏教
- ヒンドゥー教
- イスラーム教

東南アジアの仏教
上座部仏教が、ビルマ、タイなど東南アジアに伝わり栄えた。厳しい修行と戒律の厳守が特徴。

チベット仏教
インドの後期密教が土着のボン教と融合して形成。

日本への仏教伝来
6世紀、朝鮮半島経由で大乗仏教が伝来。中国との国交でさらに発展した。